



GSDy2009 Summer
HIROSHIMA TOMONOURA
2009.7.11 – 7.12



企画情報

■企画名：GSDy2009 夏 ひろしま鞆の浦見学会

■開催日時：2009 年 7 月 11 日（土）～12 日（日）

■開催場所：広島県広島市、福山市鞆の浦

■特別ゲスト：

西村浩さん 株式会社ワークヴィジョンズ 代表

松居秀子さん NPO 鞆まちづくり工房 代表

■企画趣旨：

魅力ある都市景観を目指して、広島市では「ひろしま 2045：平和と創造のまち」を 1995 年から開始し、公共事業の優れたデザイン整備を積極的に推進しています。一方、福山市鞆の浦は NPO による町家再生事業や港湾の埋立架橋反対運動など、まちの活性化や景観保全に向けた市民レベルに活動が盛んな地区でもあります。両地域の見学を通し、デザインを志す若者として、また同時に一市民として、デザインやまちづくりの現状や課題を学ぶことを目的とします。

■企画内容：

- ・ 福山市鞆の浦の見学
（鞆対潮楼、太田家住宅、医王寺、お手火まつり）
- ・ 広島市内の見学
（平和記念公園、平和大橋、西消防署、環境局中工場、世界平和記念聖堂）

■スケジュール：

10:30 福山駅 集合	8:40 鞆港発
11:00 福山駅発 (連絡バス)	(連絡バス、JR、市電)
11:40 鞆港着 宿泊先へ移動 昼食	11:40 広島市西消防署着、見学 12:30 平和記念公園へ移動 西村さんと合流 平和大橋、記念資料館 昼食
14:00 松居さんと合流 NPO の活動等についてお話を伺う	14:50 平和記念公園発 (バス)
15:30 鞆の浦散策 太田家住宅 対潮楼・福禅寺 医王寺 波止場	15:10 南吉島着 広島市環境局中工場着、見学 16:00 南吉島発 (バス)
19:30 夕食	16:30 八丁堀着 世界平和記念聖堂
20:20 お手火まつり見学	17:00 八丁堀発 17:10 広島駅着 17:30 懇親会開始 19:30 懇親会終了 解散



■ 鞆の浦とは？

鞆の浦（ともものうら）とは、広島県福山市の沼隈半島の南端に位置する古代より栄えた港・港町である。かつては鞆の津とも呼ばれ、円形港湾で近世の港湾施設が現在まで残されているのが特徴。現在、鞆港は福山港の一地区となっている。沿岸部と沖の島々一帯は「鞆公園」として国の名勝及び国立公園に指定されている。1992 年には都市景観 100 選に、2007 年には美しい日本の歴史的風土 100 選にも選ばれている。

□ 鞆の浦基礎データ

- ・所在地 広島県福山市
- ・観光客数 172 万人（入込観光客 103 万人 地元観光客 69 万人 2004 年）

・保護

文化財保護法

国の重要文化財

太田家住宅及び朝宗亭（鞆七卿落遺跡）、備後安国寺釈迦堂、堂内の木造阿弥陀三尊像・木造法燈国師坐像

国の史跡 鞆対潮楼（福禅寺境内）

国の名勝 鞆公園

自然公園法 瀬戸内海国立公園（1934 年 3 月 6 日指定）

・見所

- 世界に三つしか現存していないといわれる自然の円形港湾
- 江戸時代の町屋、波止場、雁木、焚場、常夜灯、船番所などの近世港湾施設
- 多数の史跡、文化財が集中的に存在する町並みの内部
- 医王寺からの鞆の浦の景観

■ 鞆の浦の歴史

□ 鞆の浦の歴史

①～江戸時代

「潮待ち港」

瀬戸内海の珍しい地形と潮の満干が原因で潮流の逆転現象が起こる。その潮が出会い別れる場所に鞆の浦という天然の良港があったため、そこで潮の流れが変わるのを待つことを「潮待ち」と呼んでいた。そして、このことが二千年に渡って鞆の浦を繁栄させたと言われている。

②平安時代～戦国時代

西日本の海上交通の要所であった鞆の浦は、軍事的にも重要な場所であり、そのため長い間戦乱に巻き込まれ続け、数多くの英雄伝と悲劇を創り出していった。

「足利は鞆に興り、鞆に滅ぶ」

足利尊氏から15代将軍足利義昭まで二百年以上に渡って続いた「室町幕府」は、ここ鞆の浦で天皇からの命令書である院宣を尊氏から受け取ったことから始まったという。また、最後の将軍義昭は、織田信長によって京を追放され、鞆の浦で毛利氏の加護のもと「鞆幕府」を開いたが結局滅んでしまった。そのため「足利は鞆に興り、鞆に滅ぶ」といわれている。

③江戸時代

長い戦乱も終りを告げ太平の世が訪れると、鞆の浦は交易都市として栄え、巨万の富を手にした豪商が社会・文化事業を盛んに行なったため、鞆は最先端の文化都市としても花開いた。

④江戸後期～昭和中期

「明治維新」を境に日本は近代化が大きく進み、帆船から機関船、そして鉄道へ、運送手段と時代の変化は交易都市”鞆の浦”を伝統産業の町へと変え、さらに鉄工業の町へと変えていった。

⑤昭和後期～現在

大正時代に「名勝・鞆公園」の指定を受けて以来観光地としてもその名を知られる鞆の浦。その二千年の歴史をそのまま残す町並みが貴重な歴史遺産として世界的にも注目されている。なかでも、世界遺産に向けての運動が現在活発に繰り広げられている。

◇世界遺産に向けて

時代の波に翻弄されてきた鞆の浦は、近年新たな展開を見せている。日本初の国立公園に指定された美しい景観と、万葉の時代からの姿を残した町並みを保全しようと、2002年に「全国町並みゼミ第25回大会」が開催され、そして同年、米国の世界文化遺産財団の「ワールド・モノメント・ウォッチ」の選定地区に指定された。長い繁栄の歴史を積み重ねた鞆の浦は、世界遺産として残そうとする動きが大きくなってきている。

■鞆の浦紹介

□鞆の浦の見所

名所・旧跡・古寺が数多く点在する鞆の浦。様々な商家の遺構のなごりを垣間見ることが出来る。また、祭事なども年に2回行われている。

・鞆対潮楼

朝鮮通信使の迎賓施設として使われた。座敷からの海の眺めは素晴らしく、1711（正徳元）年、朝鮮通信使の李邦彦は「日東第一形勝」と賞賛し、1748（延享5）年、洪景海は対潮楼の書を残している。

・太田家住宅

鞆の浦と言えば古い町並みがとても有名だが、なかでもこの「太田家住宅」は国の指定重要文化財になっている。

元は福山藩の御用名酒屋を務めた保命酒の蔵元「中村家」の屋敷で、明治時代に太田家の所有となった。瀬戸内海の近世商家建築を代表するもので、1991年5月31日に国の重要文化財指定を受けた。また鞆七卿落遺跡（ともしちきょうおちいせき）として広島県指定史跡（1940年指定）となっている。

・医王寺

826年に空海により創設。医王寺から山道を15分ほど登った先の太子殿からのぞむ瀬戸内海と仙酔島の風景は絶景と言われている。

・港湾施設関係

常夜燈（とうろどう）、雁木、波止場、焚場、船番所が全て揃っているのは全国でも鞆港のみであり、江戸時代からの港湾施設が現在まで形として残されている。



□鞆の祭事

・お手火まつり（日本三大火祭り） 旧暦6月

この神事の起源は不詳であるが、公式には鎌倉時代末に始まったと考えられ、天正年間（1573～1592年）まで行われていた。それから300年以上も中断されていたが、1917年（大正6年）に再興され、1973年（昭和48年）3月31日、福山市無形民俗文化財に指定された。

鞆祇園神社（明治政府の神仏判然令、いわゆる“神仏分離令”により、今は「沼名前神社」という名前に変更させられている）の祭神・素盞鳴尊（すさのおのみこと）の神輿渡御（みこしとぎょ）に先だって行うお祓いの行事で、昔は旧暦6月4日に行われていた。現在は旧暦6月4日に近い土曜日に行われる。また、雨・台風の日であっても行われる。

・鞆町並ひな祭

”潮待ち”の港町・鞆には、江戸時代からの港湾施設・中世の町割、その上に形成された歴史的な町並みが残し、鞆ならではの景観を形づくっている。その風情豊かな町並みのなかで、「鞆・町並ひな祭」を実施し、県外から多くの人々を迎えるという趣旨で毎年2～3月に行われている。

■まちづくり NPO の活動

□鞆まちづくり工房

・鞆まちづくり工房とは？

NPO(特定非営利活動法人)「鞆まちづくり工房」は、鞆の浦の歴史的環境のすばらしさを次代に引き継ぎ、町並みや港湾施設、伝統的な産業など歴史的遺産を活用したまちづくりを提案し、実践していく団体です。

・設立趣旨

広島県福山市鞆の浦は、瀬戸内海に面し、そのほぼ中央に位置する、人口6000人ほどの港町です。ここは万葉時代から中世、近世にわたり、天然の良港に恵まれ、港町として栄えてきました。現在なお、江戸時代からの伝統的な本瓦屋根の町並み、港湾施設など、町全体に漂う歴史的遺産、歴史文化の厚み、それを見事に使い続け、刻み込んできた豊かな時の魅力は、鞆独特の風情、暮らし、生業、祭と人情と、多くの現代社会が忘れてしまった豊かな生活があります。しかし、他の古い町と同様に、鞆も人口が減少し、高齢化、過疎化、歴史的建造物の老朽化などの多くの問題を抱えています。

わたしたちは、長い時間をかけて先人達が育んできた歴史的環境の素晴らしさを引き継ぎ、町並みや港湾施設、伝統的な産業など歴史的遺産を活用したまちづくりを地域の住民、県民や行政に対して提案、実践し、鞆の浦の魅力を探っていこうという趣旨のもと、活動をしています。

(鞆まちづくり工房 HP より)

—行っている事業

・空き家プロジェクト

鞆町は、高齢化や建物の老朽化に伴い、空き家の数が年々目立つようになり、町の活性化が問題となるなかで、空き家を無くしていくことで、地道ながらも活性化への道を歩む計画として、空き家の利活用、促進などの提案を行っている。

・竜馬ゆかりの町家修復プロジェクト

空き家プロジェクトの一環としても考えられている(？)、町家の再生プロジェクト。いろは丸事件で坂本龍馬と紀州藩が談判した旧町役人魚屋萬蔵宅が鞆の浦に現存していたが、数年空き家になっていたところ、2003年に売りに出された。取り壊しといった話も出たが、鞆まちづくり工房が借り入れを行い購入、鞆の町において活用していく方向でプロジェクトを進めている。

□ 鞆の浦埋立て架橋計画問題

鞆町の活性策として1983年に港の一部を埋め立てて道路と公園を整備する構想が広島県から公表され、反対運動などから凍結されていたが、2004年に鞆町出身で推進派の市長が当選したことから実現に向けて動きだし、景観か開発かの選択で揺れている。

現在、反対運動として活動している任意団体などもおり、その進退が問われている。

・ 計画の背景

鞆町の道路は大部分が江戸時代から継承されたものであるため、幅員が狭く車の円滑な通行に支障をきたす箇所が多く存在していた。また、この地域は少子高齢化が進行し産業の衰退も深刻化していた。この為、広島県と福山市は、1983年（昭和58年）に鞆地区を東西に結ぶ県道47号線バイパスの建設を計画した。この計画は港の兩岸を埋立てと橋梁によって結び、同時に近代的港湾施設や公園などの整備も行い地域活性化を図るものであった。

その後、景観保護の立場と生活向上の立場によって対立した意見が取り交わされ、計画の変更など紆余曲折があり今に至っている。

■参加者の感想

■デザインオフィスオポジション 下田明広

初日の見学地である鞆の浦について予備知識がないまま見学会に参加しました。なのに、他の参加者がまだポニョを見ていない事に対して腹を立て、「事前学習がなっていない」と言ったことについて、まず反省したいです。

初めて訪れた鞆の浦は、とても良い所でした。伝統的な街並みや港湾施設がヒューマンスケールで存在し、半日もいると行きたい場所に地図もなく行くことが出来るようになります。また、古い空き屋を再生させた食事処では店主の鞆の浦に対する思いを聞けたました。それらはとても魅力的に感じました。なので、僕はすぐに鞆の浦埋立て架橋計画反対派になり、埋立中止を求める署名をしました。

二日目の広島見学では、色々な建物を観ました。有名な建物は特徴的なデザインで目を引きます。それから、西村さんに平和大橋歩道橋について説明して頂きました。パースと実際の場所とを見比べながら設計者から説明をしてもらうなんて貴重な体験でした。現状では雑然としたまわりの風景でイサムノグチの親柱は存在感を失っているのですが、それがどのように見える様になるのか完成後が楽しみです。

ユースの見学会では色々な人や風景に出会えるから好きです。ありがとうございました。

■東京理科大学大学院 吉田正哉

今回の見学会は人数が少なかったですが、結果的にはそれがよかったと思います。人数が少ないので思い切ってレンタカーをあきらめて公共機関に頼ることもできたし、一箇所を回れる時間も多く取れたように思います。

一日目の鞆の浦では海や街並みを眺め、お手火という祭りを楽しみました。ほかにも道路建設反対派のNPOで活動している方から、道路建設をめぐる民と官、国と県や市、住民同士の意見のあり方を聞くことができました。話を聞くとそこでの生活を取るのか、観光資源をとるのかという難しい問題が出てくるようでした。これも世代間や住む地域で意見が割れているそうなので町が一つになっていくのは大変なのだろうと感じました。

2日目の広島では平和大橋を前にしてワークビジョンズの西村浩氏からお話を聞くことができました。設計者の話を、設計した建物やこれからの計画の敷地を目の前にして聞くことができたのは非常に良かったです。加えてプレゼンの勝つための手法を開けたのも貴重でした。広島に関しては谷口吉生設計のごみ処理場に行きたかったのでそこに行けたのが良かったです。それと、その後で行くことにした村野藤吾設計の教会も50年以上前のものとは思えない素敵な建物でした。モダニズム建築と言えるであろう谷口吉生の建築を見た後に、組石造風RC造、素材感むき出しで西洋趣味を前面に押し出した村野藤吾の建築を見れたのは、建築が今後どのような形で残っていくのか、どうあるべきなのかなどいろいろなことを再考する契機になったかなと思います。

■アトリエ74 永山悟

7月11、12日の土日で広島を旅した。

夜行バスの席が取れず、飛行機で広島へ向かった。朝一の飛行機は安い、夜行バスよりは極めて高い。ぬかった。見学会はいつも通りとても充実していた。鞆は鞆の浦の風景、路地の迷路感、お手火祭の活気、鮮魚のうまさ、町屋を改造した宿の懐かしさ等々。広島は路面電車、平和記念資料館、平和大橋、世界平和記念聖堂等々。満喫した。それらの体験を踏まえての感想は以下の通り。

■行政の責任は重い

僕は鞆の浦の架橋には反対だ。今の裁判に負けて、橋がかかるのは嫌だ。しかし現在、鞆の住民同士が二分して争っているのはそれと同じくらい嫌だ。その争いの原因は広島県と福山市にある。今、争点になっているのは交通、下水、景観等々。仮にそれらを総合的に見て架橋案が良かったとしても（そんなことは絶対に無いが）、現状のように住民を二分する争いを生んだことによる損失は甚大だ。反対があまり起こらないトンネル案と比較して、総合的にみて住民を幸せにするのはどちらの案かは明確だ。このような事態を招いた行政の責任は重い。

■コンペ選定に大切なのも総合的な視野

西村さんにいただいた平和大橋コンペ案の説明の中で最も印象的だったのは、「桁橋」という形態の選定思想だ。斬新な構造形態を提案して落選した過去の橋梁コンペの経験を活かし、今回は手堅く「桁橋」を選んだ。象徴的な平和大橋の歩道橋ということで今回も構造的な新しさを試みることを頭をよぎったそうだが、総合的にみるとこのコンペに勝つには「絶対に桁橋」だった、と。何事も総合的にみるのが大事である。

（それにしても、広島県は平和大橋歩道橋のコンペをやる一方で鞆の浦に橋をかけようとしているなんて、景観への考えが分からない。橋を架けるという点では一致しているが。）

■広島住みたい

駄文だが、広島は市内には路面電車も川も瀬戸内海も野球チームもサッカーチームもあって、周辺には尾道や呉等々の魅力的な場所があって、住んだらとても楽しいだろうなと強く思う。

■ユース諸兄、見学会に参加しよう。

もっと現場を見よう、感じよう。一人旅もいいが、ユースの見学会は得られる情報量が違う。その町・場所・建物をより深く知れる。一番良いのは一人旅と見学会の両立か。どうにか時間とお金を作って、ぜひ。

以上、感想でした。繰り返すが、とても充実した見学会だった。何より、松居さん、西村さんの懇切丁寧な説明に感激した。本当にありがとうございました。あわせて、東大景観研の西村君もありがとう。

最後に、準備をしてくれた石川さん、その手伝いをしてくれた吉田君、並木君、ありがとう。

永山

■東京工業大学大学院 加藤俊介

広島見学会の思い出を振り返ると一番印象的だったのは鞆の浦のお手火祭りである。今でもあの時のことを思い出すと体がじんわり熱くなるのを感じる。

今回の見学会では「価値観」が自分の中ではキーワードだったように思う。広島で見た西消防署も中工場も平和記念聖堂も全く違った価値観で作られていて面白かった。また鞆の浦の埋め立て架橋の話も住民の価値観のすれ違いの問題であった。

西消防署

山本理顕さんらしい入れ子の空間づくりだった。平和大通りに面した廊下は大通の緑の見え方と光の差し込み方もなかなか気持ちよかった。日曜日だったこともあり消防士が活動しているシーンは実際には見られなかったが、僕の頭の中にもそのイメージを思い浮かべて建築を見ていなかったと思う。

平和大橋

平和記念公園で西村さんと合流して公園内を回る。原爆ドーム、平和記念資料館、平和の門、軸線を明確にした都市デザインは今まで感じたことのない緊張感。ただ原爆ドームを見て思ったほど共感を持つことができていない自分につながりした。

そのあとに平和大橋を見ながら西村さんにコンペについて解説してもらう。前に雑誌でコンペの記事を見たときはよさが全然分からなくて解説していただいてやっと理解。提案の重心は構造とコンセプトにあった。

中工場

建築がごみ処理施設や海の景色、幹線道路を生け捕りにして想像力が勝手に働く気がした。道路→中工場の貫通通路→海のラインを見ていて中工場は『門』だなと思った。アカデミー賞とった『おくりびと』の火葬場を人生の門に例えるシーンと重なった。都市広島で出たゴミは海に帰るのか、空に帰るのか。そんなことをぼんやり考えていた。その時も人が建築の中にいるイメージを作っていなかった。

世界平和記念聖堂

ガラスの建築とモダニズム建築のあとに見た古典的な建築はすごくディテールに手が込んで見えた。村野藤吾の建築は多少知識があったので見どころがつけやすかった。

おごそかな空間で学生は自分も含めて好奇心丸出しだったような気がする。その中でいつもワイルドな西村さんの佇まいが丁寧であり聖堂に対して敬意を払っているように見えた。空間にあった立ち振る舞いをもうちょっと学ぼうと思った。

最後に

西消防署や中工場は新しい価値観を提示してくれている建築だと思う。しかしその価値観はいつまで新鮮なのだろうか。平和記念公園ですら価値が周辺の建物の変化や時代の流れに埋もれ始めている。

初めての見学会は色々なことを考えるきっかけになった。デザインの本質をとらえる力と空間の利用者に共感をもつ力は養っていかないと。次回も参加します。

■九州大学芸術工学部環境設計学科 上ノ菌正人

GSDyに入ってこういうイベントのような集まりに参加するのは初めてでちょっと緊張しました。7名と適度に少人数で、また適度に移動時間があったことで参加者の方々とたくさん話をして打ち解ける時間ができ、個人的には順調なかたちで見学会がスタートしました。福山駅からバスで向かった先は鞆というところで、これでトモと呼ぶということを知らなくて、人口5000人程度の小さな港町で一時期は栄えていたり、あの室町幕府の足利家といろいろな関係があったり実は瀬戸内海を中心部だったり日本で始めて国立公園に指定された場所だったり世界に3つしか現存していない湾のかたちだったりこの場所を境にして瀬戸内海の流れは逆転したり何より最近だとあの宮崎監督がポニョの構想を練った家があったりなんてことも当然知らなくて、自身の知識のなさを痛感しました。ちなみにポニョは未だ見ていません。

この町の風景はパンフレットで少しみて、はじめに思ったことは、こういう地方の町を見たことのある人には、ある意味既視感のあるような風景に写るのではないかと思いました。でも、どんな見た事あるような風景を写真で見ても、実際に行くと空間として雰囲気として感じると、どこどこと似てると思うことはあれど基本的に新鮮に映るということに、人の空間認識のすごさを見ました。このなんとも言えない、ぞくつとした、新しい、自分にとって未知であるものを体感した瞬間っていうのは町を見ることが好きなひとにとっては何より気持ちいいですね。もちろん実際は、この鞆の浦という場所は、港の景色から町並みに至るまで本当に歴史を感じる場所でした。町の中の風景はまあ古き伝統建築だったりもしくは昭和のレトロな匂いを残した雰囲気です。細く曲がった坂の道があったりして、僕のようなこういう雰囲気好きにとってこれほどの風景もそうそうないと思います。ただ細い道など現代の生活には合わないところも多いので、特にこの場所で生活している人たちには一概にいいとはいえない、そこが正に今この町が抱えている問題でした。この鞆の港に大きな橋をつくる、つまりそれはここの景観が大きく変わること。鞆まちづくり工房の松居さんから話を伺って、どうやら反対派も賛成派もちゃんと言い分はあるみたいで、手法や話の伝え方の違いはあれど、どちらも確かにまちがってはいないと思いました。ここで僕が思ったのは、手法に関する話を聞いたときで、今の道は車が相互通行するにはせまいので、とりあえずは片側通行にして、そのルートをうまく処理することによって現状をしのぐという話を聞き、こういう、いわゆるソフト面の解決方法というのをもう少し考えていく必要があるのではないかと思います。制度や車の流れを調整することも立派なデザインであり、モノをつくらないデザインはどうしても視覚化されていないだけに目立たないけど、これからは建築も都市もモノも、あえてつくらないという、見えないデザインのような考えが、打ち出されていかねばならないのではないかと思います。でもデザイナーで食べていくには目に見えるものをしかも個性を打ち出して売っていかないとけないという現実もあったりで、難しい問題だなと考えているうちに本題から大きくずれてしまい、今は鞆のまちづくりの話ですが、一番思ったのは、橋案も、その代替案として出されたトンネル案も、莫大な予算がかかり、また工事期間も何年にもものぼるので、決定には本当にいろんな人が関わるんだなと、それをまとめたこととは本当に大変なことなのだと、将来こういう世界に人より深く関わりたいと思う自分には感じられました。僕はやっぱりこんな風景はたまらなく好きですが、でもここに住む人が一番住みやすいこと、“ここ”で住む事が誇りであることが一番大事じゃないかなと思っています。その結果景観が変わればそれは必然だけで、ここに住む人何人かと話を聞いたりしたのですが、ここで住む事が幸せなことであることが一番だと思いました。

夜はこの地域に古くからあるお手火祭りという火祭りへ行ってきました。見応えは本当に最高でした。最後に祭の中心から離れて、みんなで夜の港を見に行きました。もう既に漁がにぎやかになっていました。漁っていうのも考えてみると、本当に別世界の出来事だと痛感します。

いつもスーパーに魚が並んでるのは、こういう所から夜遅く遠い暗い海へいく漁船と人あってのもので、毎日暗い夜の海へ行くという世界は、どんな世界なんだろうかと考えてしまいます、おそらく自分とは全く違う日常の世界の見え方をしているのだと思いました。夜の海は月の光と海面がつくる風景がとても奇麗でした。

12日は広島市内へ戻りました。まずは山本理頭設計の広島西消防署へ

こういう建物はコンセプトも形態も当時としては実験的で、なにか新しい価値を開こうとしているのがわかるから好きです、けど中を歩いていると確かにわくわくするけれども、欠点として清掃の限界があることが否めなかったです。こういう構造が全面に出ていたりする形態という、どうしても人の手では届かないところがでてきて、かつ人が全く通らない場所がたくさん現れるため、ルーバーにしる屋根（床）部にしろ、とても汚いところがあったのは気になりました、つまりは維持がとても大変そうだと感じました。でも、昔の建築というものはそもそも修繕や改装の繰り返しが当たり前であったと思うと、今の自分たちが建物に対して怠惰であり、永続性を求めすぎているのかもしれないとも思いました。いつも部屋が汚い自分がちょっと恥ずかしくなりました。しかしこの建物の内部空間を見ていると、模型でこの、なんというか、ヴォイドとボリュームの関係や視線の抜けなどをたくさんスタディしてこの空間構成の関係になったのかなとか想像できてなんか面白くて、個人的には楽しめました。自分がここの消防士だったらちょっとこの透明ガラスだらけの空間は少し恥ずかしいですが。。

この後は平和記念公園へ。講師の西村さんをお迎えして、平和公園をぐるっと回りました。コンペの苦労話や、役に立つテクニックを教えていただきました。ここから見ていく建物についてもいろいろ話をさせていただいたので、とても勉強になりました。イサムノグチとこの公園の関係などは、西村さんから話を聞かなければ気にもとめていなかったと思います。西村さんの橋が完成する時が本当に楽しみにになりました。

西村さんがおっしゃっていた通り、この場所の水平性と対称性は本当にものすごい求心力をもっているように思います、日本ではあまり見られない景観。心なしか海外の人が歩いている風景がよりマッチしていました。日本にこういう場所があまりないからこそこういう場所に立つものすごい引力にひかれるような気がします。広島に住む人はここが日常的に通ったりする場所になりうる、と考えると・・・自分の住むところの近くにこんなに力をもつ場があったら日々の生活はどうなるだろうかと思いました。歴史的にも空間的にも強い力をもつ場をここに住む人は日常の通学通勤のルートとして通っているというのは、個人的にはとても凄いことのように思えました。僕の場合はこの近くに住むときっといつかはこの状態に慣れてしまうだろうけど、それまでは確実に毎日場の力を感じながら暮らすだろうなと思いました。

この後、広島市環境局中工場へ僕は実は一回ここに行ったことがあり、前行ったときはぎりぎり一回生のときでした。当時とはとにかく近未来っぽい！くらいしかなにも思っていませんでした、今回、もう4回生となり、少しは勉強してきた・・・のですが相変わらずな近未来がそこにありました、くらいしか書けません。言葉足らずですみません。しかしいつ来てもここはテンション上がりますね。というか本当にガラスがピカピカで、毎日だれか完璧に掃除しているのだろうか、ってくらい指紋ひとつガラス面にはなかったです。ガラスの透過度がここのガラスは半端無く高い気がしました。谷口さんの建築はどれを見ても思うのですが天井の継ぎ目からベンチに至るまでなんでここまで絶妙なバランスの比がとれるのかと思ってしまいます。写真より実際に行くとより感じます。全てがびしっと決まっている、小学生のときランドセルに教科書とか詰めるとき全くふくらむことなくぴったり詰まったときの感じもしくは小学校の机にあったお道具箱に入れる新しい道具を買って入れるときに気持ちいいくらい空いてたところにぴったり入る感じですがそもそもお道具箱とかほかの小学校に

あったんですかね、よくわからないたとえですいません。この建物は理念もほんとうに素晴らしいと思うので、もっと有名になればいいなと思いました。

そして路面電車に乗って、次は村野藤吾設計の世界平和記念聖堂へ向かいました。僕は村野藤吾っていう時点で無条件にやばいと思うくらいの無類の村野好きだと思ってますがもうこの建物のファサードは見た瞬間にぞくっときました。村野藤吾っていうと、日本を代表する建築家の一人であったことは間違いのないと思いますが、普通の人はまず聞かない名前だろうしその詳細は建築やっている学生でもたくさんいないかもしれません。僕も無類の村野建築好きですがたぶんそれほど彼のことは知りません。村野と他の建築家の大きな違いとして、村野は一貫したスタイルというものをもっていない点があげられるのではないかと思います。安藤建築や丹下建築とはその点が決定的に違います。だからなおさら彼のスタイルがわかりにくいのではないかと思います、けど彼の建築を見ていくと、見た目こそ違えどどの建物も間違いなく村野であるといえるものがあるとわかります。たしか誰かが例えていたけど、川のようなもので、上流や下流でその姿や表情は大きく変わるけども、でもどれも同じ川であるのと同じように、村野藤吾の建築やインテリアにはそういう感じがあると思います。そんな村野藤吾が1950年代に設計したこの世界平和記念聖は、個人的に本当にいつか行きたかった建物です。村野藤吾の教会は大阪にもいくつかあって見たのもあるけど、本当によくて、教会である空間がもつ要素を満たしていてかつ村野藤吾ってわかるあの空間はすごすぎると思います、なんて入る前から気持ち悪いくらいそういうことを考えながら中に入りました。入った感想は、実際は、なんかもう覚えてないです。ただ圧倒されました。建築的には日本風の意匠がどうか丹下の東京のカテドラル聖堂と比べてなんたらかんたらあるらしいのですがけどそんなことをすべて考えさせない空間がそこにあったと感じました。このときはもうなんかなんにも気の利いた言葉なんて思いつかずただ、ここにあるべくしてある建築だと思いました。

丹下健三しかり、広島は本当に濃密な空間がたくさん有る場所で、それは歴史だったり有名建築家だったり様々な要因が複雑に絡み合って時間をかけて形成されていったように感じられました。

最後の懇親会で飲んだビールのおいしさとさっちゃんのことは忘れられないものになりました。最後になりましたが、幹事の石川さん、そして加藤さん、下田さん、永山さん、並木さん、吉田さん、初めての方ばかりでしたがすぐにたくさん話をするのができて本当に楽しかったですし、いろいろ勉強になりました。本当にありがとうございました。そして講師の西村さん、松居さん、その他多くの関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

■ 早稲田大学大学院 並木義和

僕がGSDyのイベントに参加したのは、昨年夏のWSを除いては、正式には今回の見学会が初めてかもしれない。資料づくりの手伝いをした延長で、勝手も何もわからないまま参加することになってしまったが、むしろそれでよかった、というのが正直な感想だ。

今回の見学会は、人数もそこまで多いわけではなく、まとまって廻るにはちょうどよかったと思う。最も印象に残っているのは、広島のアモの浦にて感じた、「保存」の考え方が他と違うことだった。特に、空き家を改修して飲食店として使っている場所では、或る意味「使ってこそその保存」という考え方が浸透していて、日本中が保存ブームで形だけ残すのが通例のなか、大事に使いながら次の世代に残していくという、自然な流れ・仕組みが出来ていて興味深かった。

アモの浦自体は、本当に少ししか居られなかったが、日本三大火祭りの「お手火祭り」を観られたり、アモの浦の街並みを守るために活動しているNPOの方々から話を聞くことが出来て、景観を勉強している身としてはとても面白かった。各地のお祭りというのは、その場所に住む人たちの生活というか、息づかいや雰囲気ダイレクトに感じ取れるいい機会だと思っていて、「お手火祭り」も例外ではなく、地区ごとに集まった若い衆が掛け声をかけながら火の燃え盛る木を背負う姿に、田舎(と言ったら失礼かもしれないが…)にも頑張っているところはたくさんあるんだ、と安心したり、自分も頑張らなきゃなあ、と気持ちを引き締めてみたり、そんなことを感じた滞在だった。

アモの浦で過ごした後は打って変わって、平和大橋コンペの作品を中心として、WorkVisionsの西村浩さんと一緒に市内の主要な建築を廻る旅となった。僕の場合は専門が景観だけに、建築を観るといっても視点がなかなか定まらず、どういうところに注目するかは難しいところだったが、周りがほとんど建築学科だったことに便乗して、西消防署をはじめとして環境局中工場や平和祈念聖堂などの建築ではディテールをよく観ることができたのが新鮮だった。

といった感じで内容としては、前半のアモの浦でゆっくりとまちの雰囲気を感じ取り、後半では広島市内の建築をがっつり観る、という二つのテーマを同時に実現できたことが面白かったなあと思う。一見するとまったく関係ないような形での見学会だったが、会全体を通して考えさせられたのは、結局のところ建築や土木の力というのはどれほどまで周りにいい影響を与えられるのだろうか？という個人的な疑問に対する何らかのインスピレーションが得られたかどうか、ということだ。それはまだ明確ではないけれど、もっと色々な場所を観てまわることで少しずつ創りあげていきたい。

それに加えて思うのは、GSDyのような他分野の人たちが集まるグループにいて、それぞれ異なった視点で対象を観ることができ、さらにその上で議論ができる、そんな環境のなかにいられることには、本当に感謝しなきゃいけないということだ。そのためにも、自分のバックグラウンドをどこまで高めていくことができるかがポイントで、もっともっと成長したいと思う、そういうきっかけづくりにもなるのかな、と僕は個人的にはそう感じた。

もっと参加しとけばよかった、といっても始まらないので、チャンスあらばこれからどんどん関わっていこうと思う。幹事のいしかわさん、良い旅をありがとう！西村浩さんには、建築を観るときの意外な視点を教えていただいて、目から鱗でした。本当にありがとうございました。

■東京農業大学地域環境科学部 石川真衣

まず始めに。

お忙しい中、快く講師を引き受けて下さった西村さん、松居さんに心から感謝申し上げます。準備不足など至らぬ点多々あったと思いますが、参加して下さいた皆さん、サポートして頂いた代表の方々、会計の中野君、本当にありがとうございました。

鞆の浦に降り立って最初に眼に飛び込んできたものは、港の対岸にある「生活優先！」という大きな垂れ幕。町を歩けばそこかしこに「生活優先！」や「建設反対！」など賛成派と反対派のポスターがあり、さらにはそれが隣同士、向かい同士に貼られているという異様さ。この町で起こっている橋梁建設問題は、市民同士の対立を生み、もはや世間話として話すことさえ一種のタブーになっているという。

そんな状況の中でNPOを運営する松居さんは、内部の損得感情だけでなく外部からも鞆の浦の価値を再認識してもらい、街全体の活力を上げようと積極的に活動していた。

鞆で育ち、鞆に暮らす。日常で当たり前のように接している町並みや港や里山は、都市に比べたら確かに不便な面もあるかもしれない。けれど、それを補うほどの豊かさを沢山持っているという事に市や町の人も気づいて欲しい。地元の材料で作られた手料理やスイカを振舞いながら、そんな言葉をポツリと仰っていたのが印象的だった。(どれも絶品でした。ご馳走様です。)

おそらくはモノを作る設計者以上に、そこに住まい、使っていく生活者次第で街というのは大きく変わる。だからそれぞれが意識しないといけないし、意見を発信すること、それに伴って何らかの行動を取るというのは大変重要な事なのだと改めて思う。普段の自分を反省したい。

生活者としての目線でじっくり鞆の町をみた初日に対し、設計者としての眼を肥やすためざっくり広島をみてまわった2日目。西村さんが平和大橋歩道橋コンペ案の図面や資料などを用いて説明して下さい、戦略的な色の使い方や桁橋にこだわった理由なども直接聞くことが出来た。細かい構造の話など、正直自分にはわからない部分も多かったけれど、コンセプトの立て方、ストーリー展開など、分野を問わず参考になることも多く大変勉強になった。

今回は「ひろしま2045」という軸に沿って西消防署(山本理顕)や環境局中工場(谷口吉生)も見学し、皆さんのリクエストもあり、せっかくなので世界平和記念聖堂(村野藤吾)にも寄った。

古い建築、新しい建築。はたして2045年には両者はどんな変貌を遂げているのか。その時の価値とは一体何が基準になっているのだろう。そんなことを思いつつ、素材感や、重厚感、ディテール等、時代の潮流と作者の個性も相まって、どの空間もすべて異なった雰囲気を出していた事に今更ながら感心した一日となった。

最後に。

ユースの旅に参加するのは初めてで、企画する内心不安も多かったのですが、個人旅行では経験できない体験や、同行者のおかげで気づけた事など、結果的に得るものがとても多い旅となりました。何よりユースの一員としてより深く関われたことに感謝しています。本当にありがとうございました。

■ 会計報告

収入				備考
会費	¥12,400	7	¥86,800	
援助	¥94,951	1	¥94,951	講師謝礼金、交通費、見学費、印刷費
計			¥181,751	

支出					
交通費（ＪＲ、広島市電、鞆連絡バス）		¥4,000	7	¥28,000	
宿泊（朝食付）		¥4,500	7	¥31,500	
懇親会		¥3,500	7	¥24,500	
飲物代		¥2,760	1	¥2,760	
施設見学費	太田家住宅	¥400	7	¥2,800	
	対潮楼	¥200	7	¥1,400	
講師謝礼金		¥30,000	1	¥30,000	
講師謝礼金		¥20,000	1	¥20,000	
講師交通費		¥37,100	1	¥37,100	
印刷費		¥3,651	1	¥3,651	
計				¥181,711	

残金	¥40	報告書作成に充てました。
----	-----	--------------

※ 現地での食事代は各自で負担して頂きました。

